

えど友ホームページ  
<http://www.edo-tomo.jp/>

## 江戸東京博物館友の会会報

## 目次

篤姫所用の薩摩焼や島津齊彬手作りの茶碗など…………… 1	えど友プラザ『京成白髭線が延伸されていたら』…………… 7
友の会セミナー『東海道中余聞あれこれ』…………… 2	『百人一首和歌始衣抄』…………… 7
友の会セミナー『江戸の広告メディア』…………… 3	『中山道ウォーキング』…………… 8
特別観覧会『珠玉の輿〜江戸と乗物〜』展…………… 4	『高尾山を歩く』…………… 9
江戸博クリップ『吉良家の墓所・参拝記』…………… 4	友の会事務室は地下 1 階へ…………… 8
見学会『江戸博常設展を見る』…………… 5	落語で江戸散歩…⑦『井戸の茶碗』…………… 10
えど友サークルだより/会議・会合日誌…………… 6	催事案内/会員優待のお知らせ…………… 11~12

## 篤姫所用の薩摩焼や島津齊彬手作りの茶碗など

江戸東京博物館 学芸員 橋本由起子

現在江戸博で好評開催中の日仏交流 150 周年記念特別展「薩摩焼〜パリと篤姫を魅了した伝統の美〜」について、担当学芸員の橋本由起子さんにその見どころや特別出品などについて解説いただきました。

世界に「SATSUMA」の名で知られる薩摩焼は、慶応 3 年(1867)の第 2 回パリ万国博覧会に出展され、ヨーロッパで高い評価を得ました。それから 140 年目にあたる平成 19 年(2007)、これを記念した展覧会「薩摩焼パリ伝統美展」が、世界最高峰の陶磁器専門美術館として知られるフランス国立陶磁器美術館(セーブル美術館)で開かれ、好評を博しました。本展では、このフランス国立陶磁器美術館で出品された作品を中心に、400 年の歴史を誇る薩摩焼の優品約 200 点を紹介します。

## 薩摩焼の発祥

薩摩焼の歴史は、慶長 3 年(1598)、文禄・慶長の役で島津義弘に連れ帰られた朝鮮陶工たちが薩摩の地に上陸した時に始まります。鹿児島前之浜に 20 余名、東市来神之川に 10 余名、串木野島平に 43 名、加世田小湊に数名が上陸しました。それ以後陶工たちは、多くの困難を乗り越え、種々変化に富んだ薩摩焼の基盤を形づくって

きました。

## 薩摩焼の特徴

薩摩焼の特徴の一つに、その多様性を挙げることができます。一口に薩摩焼といっても、古薩摩、白薩摩、黒薩摩、錦手、金襴手など、多種多様な作例があります。茶道に関わる人々は落ち着いた侘び・寂びの古薩摩を、民芸的な作品を好む人々は苗代川や龍門司の黒薩摩を、幕末から明治にかけて世界に輸出された絢爛豪華な作品を好む人々は金襴手をと、それぞれ薩摩焼に対するイメージは異なります。また、幕末には、平佐焼を中心に肥前系の磁器の生産も行われました。

## 薩摩焼の隆盛と

## 第 2 回パリ万国博覧会

慶応 3 年(1867)に開催された第 2 回パリ万国博覧会には、日本から幕府、薩摩藩、佐賀藩がそれぞれ出展しました。薩摩藩は、漆器やたばこ、琉球産の諸品など、100 種をこえる郷土の特産物を出品し、なかでも薩摩焼はその精巧さと華麗さで、ヨーロッパの

人々を魅了しました。この万博で薩摩藩は、「薩摩太守政府」と称して幕府と対等の立場で参加しましたが、政治の転換期における幕府と薩摩藩の関係を、そこに垣間見ることができます。

## 東京展特別出品 篤姫所用の薩摩焼

薩摩といえば篤姫を思い出される方も多いことと思いますが、薩摩焼は、篤姫の義父島津齊彬の集成館事業でも力を入れたものの一つでもあり、篤姫もまた、磯の別邸の藩窯で焼かれた香炉や置物などの薩摩焼を所有していました。そこで今回、東京展のみの特別出品として篤姫所用の薩摩焼 8 件 15 点を紹介します。併せて最近 116 年ぶりに発見された島津齊彬手作りの茶碗も展示します。

日仏修好条約によって日本とフランスの交流がはじまってから 150 年(2008 年現在)、篤姫も愛した 400 年の伝統の美をぜひお楽しみください。

(会期は 2 月 14 日から 3 月 22 日まで)

## 「東海道中余聞あれこれ」

講師 児玉修司さん (旅行会社歴史専任講師)



籠屋があり、飯盛女がひしめいていました。大名行列にお供した武士たちがここで、旅の疲れをおおいに癒したことでしょう。

### 街道整備は天下統一の証

ご存じのとおり、東海道と中山道はともに日本の幹線道路ですが、家康は幕府を開く前の慶長6年(1601)からすでに街道整備に手を付けています。その折、日本の中心を江戸日本橋と定め、ここを起点に五街道を整備していきました。では、どうして家康は街道整備を手掛けたのでしょうか？ 当時はまだ、関ヶ原の戦いが終わったばかりで、徳川政権は安定していません。西には大坂城があり、豊臣家ゆかりの西国大名が数多くいました。

“唐橋(瀬田)を制するものは天下を制する”という言葉があります。東海道の瀬田川を越えると京都は近く、唐橋を制した者が上洛を果たし、天皇を奉じて天下を制することができたのです。事実、東海道を歩いてみますと、所々に歴史上の合戦や戦いの跡を見出すことができます。つまり、街道を整備し、制することは全国統一を宣言し、徳川の権威を日本全国津々浦々まで行き渡らせることができたと考えられます。その意図を明確に示すものとして、天竜川から東の川には橋を架けさせず、わざわざ面倒な川越しや峠越えをさせています。西国大名の雄藩が、直接江戸に攻め込めないようにしていました。もちろん、これは家康ひとりがやったわけではなく、次の秀忠、三代の家光まで時間を要しております。

街道整備のいまひとつの目的は情報を早くキャッチする、ということです。そのためにすべての宿場を幕府の直轄地とし、宿駅(飛脚)制度を敷き、宿役人を常駐させました。このように、街道整備は天下統一を知らしめる確実に効果的な手段であったと思います。

### 宿場の規模と大名行列

ところで、昔のままの宿並みはあまり残っていませんが、かつての宿場を歩いてみますと、通り自体が狭くて、なぜか真直ぐではありません。意識的に曲げられています。あるいは、真直ぐな通りが一度直角に折れ、また元の方向へ折れている、いわゆる曲尺手になっています。なぜこんな形にしたのでしょうか？ ご存じのように、参勤交代は交代の時期(外様は4月、譜代は6月)が決まっていたので、江戸に向う大名と江戸から帰る大名が、真直ぐだと宿場の通りでカチ合ってしまうことがあります。同じ大名なのですが、カチ合えば、石高の低い方が駕籠から降りて、ごあいさつをし、相手方を通さなくてはなりません。主君に屈辱を与えることは家臣として極力避けなければならず、そのために先触れを出し、前方の様子を探らせ、もし、やってくる大名がより石高が高ければ、近くのお寺などに自分たちの行列を引き入れて難を避けました。つまり、わざと通りを曲げて双方から見えないようにし、無駄ないざこざを起さないようにしていた、といわれています。

宿場の大きさを、私は旅籠の数で判断しています。東海道で一番旅籠屋が多かったのが宮宿で、なんと248軒もありました。伊勢神宮参拝の客や「七里の渡し」(宮と桑名の間)の舟を待つ人で大変賑わったといわれています。主だった宿場では桑名が120軒、四日市が98軒、小田原が95軒といったところでした。東海道で最も賑わった宿場は、吉田(豊橋)、御油、赤坂の宿場で、この間はわずか12kmしかありませんが、各々60軒以上の旅

東海道は125里(約500km)、中山道は135里。中山道の方がわずかに10里(約40km)ばかり距離が長いのですが、六十九次<sup>つぎ</sup>もありました。東海道の方は、大坂まで五十七次、おや？五十三次ではないの？ といわれそうですが、広重が『東海道五十三次』という錦絵を描き、それがあまりにも有名になりましたので、五十三次(品川から大津まで)が今では定着しているようです。

### 女性に嫌われた東海道

一里塚は、二代将軍秀忠の命で整備されました。5間四方に土を盛り上げ、そこに榎<sup>えのき</sup>や松<sup>けやき</sup>などを植え、街道の両側につくられました。残念ながら、現存しているものは極めて少なく、両側とも残っているのは中山道の板橋の志村です。東海道でこの近辺では、畑宿(箱根)や三島、それから保土谷あたりです。この東海道を当時の人は12泊13日ぐらいで歩いています。1日約40km、昔の人は足が強かったですね。中山道は山道が多かったので、東海道よりも3~4日多く日数を要しました。

大勢の旅人で賑わったのは東海道ですが、こちらには大きな川があり、増水や大名行列等で足止めされることもありました。そのため中山道を選んだ人も多かったようです。女性は特に、東海道を敬遠しました。それは関所における“女改め”が厳しかったのと、川を渡るのに“川越し人足”の背中や肩車に頼るしかなかったから、といわれています。

[掲載文は主としてセミナーの前半部分をまとめました]

[記録] 文・写真: 広報部会・福島信一

# 「江戸の広告メディア」 ～歌舞伎・錦絵・草双紙に見るコミュニケーションの知恵～

講師 坂口由之さん (アド・ミュージアム東京 企画学芸室長)



## 江戸の広告活動

良い広告とは人に押し付けるものではなく、脳に訴えて学びを促すことで相手の心を動かし購買意欲をかきたてるものでなければなりません。それが広告宣伝におけるクリエイティブの本質です。「広告」という言葉は明治以前には存在せず、それ以前は「ひろめ、口上、報條、引札」などのいい方がされていました。いわゆる広告的活動が盛んになったのは江戸の中期から後期にかけてであり、この背景には町人層が経済の中心になったことと、それに伴う庶民層の識字率の高さがあげられます。併せて広告の優れた仕掛け人たちが登場したことも見逃せません。

暖簾・看板などは江戸時代以前からあったもので広告の根源的な形といえます。宝永年間(1700年頃)になると引札、歌舞伎、吉原イベント(仲之町の桜見会)などが新たな広告メディアとして加わり、さらに錦絵、草双紙などが登場しました。商業性が強いものとしては振売りの口上や買い物独案内、景物本、手拭等の配り物、広告双六などがあり、文化性の勝るものとしては神社に貼られた千社札、俳句、川柳、寄席、洒落本などがありました。

## 歌舞伎は流行の発信源

歌舞伎は吉原と並んで江戸の庶民にとって最大の娯楽でした。殊に歌舞伎役者と商人達とは、互いに持ちつ持たれつで関係で密接に結びついており、人気役者になると大衆に与える影響力は絶大なものがありました。

広告的要素を持った演目としては二代目団十郎が正徳5年(1715)に演じた「寿の字越後屋」が最初といわれています。特に有名なのは団十郎が享

保2年(1717)に初演した「外郎売り」の口上で、今日でも歌舞伎十八番のひとつとして上演されています。もっと顕著な例は「助六由縁江戸桜」です。劇中にてでくる吉原三浦屋、山川白酒、福山のうどん、朝顔煎餅、酔い醒ましの葉「袖の梅」などはすべて実在する店名や商品名であり、本演目自体が広告劇としてきわだっています。広告業界では今や常識ですが、ドラマや映画でみられるプロダクトプレイスメント(企業タイアップ)の嚆矢ともいえます。この広告的仕掛けは特筆すべき点といえましょう。

## 錦絵は江戸の花形メディア

浮世絵には肉筆画と木版画があり、錦絵とは多色刷り木版画のことです。これは鈴木春信が明和2年(1765)に創始した画期的な発明といわれますが、このアイデアを春信に授けたのは平賀源内という説もあります。町人による町人のための美術品として大評判になりました。「吾妻錦絵」として江戸の名物にもなり、文化の担い手となった版元たちの主力商品として全国にひろまりました。

錦絵には美人絵、役者絵、名所絵などの売れ筋商品があります。英泉による「美艷仙女香」の宣伝が描かれた美人絵などは今でいうポスターです。

山東京伝の営む煙草入れ具店の広告絵は歌麿が描いて評判になりました。日本橋駿河町の三井越後屋の店頭に立つ艶やかな美人絵はお正月の配り物でした。また「現金安売掛値無」のキャッチコピーの「引札」を江戸市中に大量に配るなど、今日のマーケティングの概念を発案し実践したという意味で創業者の三井高利は海外の識者からも高

く評価されています。

役者絵では坂東三津五郎の団扇絵の下に「美艷仙女香」の粉白粉のパッケージが描かれた錦絵があります。当時川柳に「仙女香十包ねだるバカ娘」などと詠まれ、十個まとめて買うとナント人気役者のサイン入り団扇や扇子がもらえるというキャンペーンがなされていました。仙女香は当時のさまざまなメディアに頻りに登場し、広重の名所絵にある旅宿の下げ札にもさりげなく仙女香の宣伝が入っています。

## 草双紙は大衆に支持された娯楽文芸

草双紙は絵入り仮名書の娯楽読物で本来は子供向けだったものが次第に大人向けに発展しました。黄表紙が特に有名で、これを長編化して何冊かにまとめると合巻になります。こうした読物の中にストーリーにはまったく関係なく、版元の取り次ぎ商品の広告がさかんに行われました。「景物本」とよばれるPR誌もあり、式亭小三馬による「賑式亭福ばなし」は粋で洒落た読み物としても秀逸です。当時の戯作者や版元ら広告の仕掛け人たちは、大衆の欲望を見抜き心に訴える術を心得たプランナーといえます。この時代の広告は文化と商業の間をうまく取り持ち、さりげなく入り込んでいました。野暮を好まず、粋で洒落がきいていることが何よりも肝心という江戸っ子の美意識に訴えることが重要だったわけです。多くの人々に人気があり、広く支持されている大衆娯楽こそが広告メディアの核という精神は、江戸期のクリエイターたちの創意工夫がもたらした大いなる知恵といえるでしょう。

【記録】 文：広報部会・小松美幸  
写真：同・佐藤幸彦

江戸東京博物館友の会特別観覧会

(2008/12/19)

## 「珠玉の輿 ～江戸と乗物～」展



江戸博にて昨年12月16日から2月1日まで開催されていた特別展「珠玉の輿～江戸と乗物」の、友の会特別観覧会が12月19日(金)に行なわれ、会員124名、同伴者27名、計151名が集まりました。本特別展は、江戸東京博物館をはじめ、日本国内外より、徳川將軍家に縁の深い乗物118点が選ばれて展示されています。特に、一堂に集められた江戸時代身分の高い女性を乗せていた高級な女乗物や輿等、蒔絵や金細工など時代の粋を集めてつくられた豪華絢爛な女乗物は、まさに「うごく、美の御殿」の名にふさわしいものです。

まず17時、1階ホールにおいて、

斉藤慎一学芸員から本特別展の見どころおよび展示物に関する解説があり、家定の生母本寿院の女乗物と篤姫の女乗物(今回、米国ワシントンのスミソニアン博物館所蔵が確認され日本初公開)との比較他、梨子地蒔絵など外装内装の絵柄、金具、文様などの細部にわたる違い等々、わかりやすく楽しい画像、軽妙な語り口で解説して頂け、つい笑いもおこる和やかな雰囲気での講演でした。

引き続き、1階展示室にて観覧会が実施されました。会場入口に飾られたNHK大河ドラマ「篤姫」で使用された女乗物に迎えられ入場すると、「プロローグ」として古代以来のさまざまな形の乗物の説明、「第1章徳川家康と乗物」では、豊臣家大老時代に利用を許可された掟書や大阪夏の陣において所用したと伝えられる網代駕籠には真田勢の鉄砲による弾痕が2カ所みられること、征夷大將軍になった折、牛車・兵仗が許された文章などがおもしろいです。

「第2章大名と乗物」で見せる存在感の重要性の中で、將軍・御三家のみが使用出来た輿、黒塗りの担棒などをまの当りに見ることができます。

「第3章女乗物の世界」の豪華さの

裏に存在する身分を示す厳しいルール・武家社会のおきてなどをかきまいる展示等のほか、「第4章和宮と輿」では天皇家出身の幕末の悲劇のヒロインとして知られる和宮の数々の持ち物が出品されています(化粧道具、衣桁、御所人形、雛人形)。特に婚礼用品には徳川家の用意した葵紋のついたもの、京都からの葉菊紋がついたものが存在し、複雑な時代背景が浮かびあがっています。

「エピソード～都市に集まる高級車～」では各界の婦人が使用した高級車が集中するという首都の特性を見せまします。釈迦如来立像を運ぶために使用された御乗輦などめずらしい輿もあります。

今回の特別展では数々の華やかな女乗物、それらに関する江戸時代の生活用品(雛道具、手箱や化粧道具・・・)など絢爛豪華な品々が並び、またそれらを通じて見ることでできる都市、江戸の文化的特性もあわせてわかりやすく解説されています。

感嘆の声が各所で聞かれる見ごたえのある展示に、訪れた方々が十分に堪能できた友の会特別観覧会でした。

【取材】文・写真：広報部会・松田悠美子



## 江戸博クリップ

### 「吉良家の墓所・萬昌院功運寺参拝記」

昨年、11月15日、地元の町会長の誘いで、吉良家の墓所・萬昌院功運寺を参拝しました。この参拝行事は両国連合町会の主催で初めて行われるものだそうです。これはまたとない機会！博物館からは管理課の菊地課長、鹿野さん、忠臣蔵展担当の丸山さん、それから私一の4人が参加。平素から義士祭、義士茶会(＝江戸博が会場ですね)、吉良祭・元禄市等々、吉良家ゆかりの行事が多い街だけあり大勢の方が参加しています。

お住職は大変お話がお上手で、お寺の引越しにあたり、首と胴をつなぎあわせ坐棺に安置されている吉良様を牛に大八車を引かせてお連れしたとのことやお話や、『忠臣蔵』の影響力が大きく、墓石にいたずらをする怪しからん人がいたりーと、書物では知ることができないご経験や、お寺の歴史を詳しく拝聴しました。お話のあとはお線香を手向けにお詣りです。また、境内にはその他にも、歌川豊国(初代～三代)や作家・林芙美子など、多くの著名人の

学芸員 友野千鶴子

墓があり、お詣りを希望される方のために丁寧な案内板も設置されています。暖かな日和も手伝って、ゆっくりとお詣りをしてまいりました。

みなさんも是非一度おたずねしてみてください。穏やかな心に残るひとときでした。

<萬昌院功運寺 中野区上高田4-14-1>

◆このコラムは江戸博の学芸員や講師など館職員の方に執筆をお願いしています。

# 江戸博常設展を見る



今回の見学会は、昨年と同じように何度かは見ているかもしれない常設展をベテランのボランティアガイドの解説を交えながら、じっくりと楽しんでもらおうという趣旨です。新入会員の方々を意識しつつ、友の会のよりどころでもある江戸博のよさを再認識してもらおうというわけです。

ご協力いただいたボランティアガイドのみなさんも、相手が友の会の人なら何度も常設展をぐるぐるまわっているだろうということで、普段あまり見られないところとか見落とすようなところを重点的にガイドして下さったようでした。

集合は江戸博3階江戸東京ひろばで構造的にも風が吹きぬける場所でしたが、天気にも恵まれそれほど寒くなく、40数名の参加者は定刻よりやや早めに点呼を済ませ、6人ほどで一つのグループをつくり、次々にメインエスカレーターで6階の常設展示室へ向かいました。

## 順路に沿って見学

ほとんどの参加者が常設展示は、個人的に見学した経験を持っていましたが、それでも友の会会員だけに熱心に説明を受けていました。

まず、江戸初期の都市構造を示す「寛永の町割り」のところで、武家地、町人地、寺社地と色分けされた江戸の模型を見て、武家地の広さに今さらなが



▲「寛永の町割り」前で

ら見入っていました。

5階に降りて、「町のしくみ」のところで町の構成と施設の説明を受け、一石橋の「迷子標」や本石町の「時の鐘」を見ていきました。

そして「絵草紙屋」や「三井越後屋江戸本店」といったところを重点的に見学したあと、「盛り場の諸相」と題した「両国橋西詰」のジオラマを見て当時の賑わいに思いをはせていました。



▲「迷子標」や「時の鐘」を見る



▲「三井越後屋江戸本店」前で

最後の歌舞伎小屋「中村座」の内部見学はみなさんととても印象的だったようで、歌川豊国画「芝居小屋内部の図」[安政5年(1858)]を興味深げに見学し、歌舞伎の楽器に触れたり、効果音を出す道具で舟をこぐ櫓の音を出してみたりしていました。

こうして約2時間の予定どおり、見学会は無事終了しました。

## 参加者の感想やご意見

この日参加のみなさんの中から何人かの方にお話を聞きました。

60歳代の男性：知らないことを質問したりして話を聞けるので、とても勉



▲「両国橋西詰」前で

強になったし、また楽しかった。

40歳代の女性：自分で見るだけだと分からないことも多いが、このように細かく説明してもらえるとよく分かるのでよかった。中村座の中を見られたのは普段ないことなのでよかった。また建設時の裏話も聞けてとても面白かった。

60歳代の男性：このような見学会は初めて参加した。一人でまわるのにくらべ、説明を聞きながらじっくり見られるのはいいものと思った。

60歳代の女性：滅多に入れない中村座の中に入れたのはとてもよかった。

40歳代の女性：特別展はじっくり見るが、常設展はいつもサラッとしか見ない。こんなにゆっくり見たのは初めてでよかった。少数数なのでよかったが、まわりの小中学生が騒がしく説明が聞き取れないこともあった。今後のこととして、常設展でもテーマを絞ってこういう見学会をやるのもいいのではないかと思う。今後に期待したい。

友の会のみなさんは江戸好きの方々ばかりで、常設展は何度見ても興味深く楽しめると思います。今回はガイドさんの細かい説明によって、その良さにほれ直した方も多かったのではないかと思います。

【取材】文：広報部会・松原良  
写真：事業部会・西村英夫

## ◎活動概況

- ◆**落語と講談を楽しむ会**：12月17日(水)お江戸両国亭に集合し、女流講談の会「なでしこくらぶ」で、「講談オリンピック12種競技」のうちの「名作」と銘打った、各国の名作をベースにした新作講談を堪能した。参加者7名。1月27日(火)田中文彬さんによる「僕のらくご人生」という話があった後、八代目桂文楽の落語「つるつる」と「素人鰻」のDVDを鑑賞し、全員で感想や思い出などを話合った。参加者10名。
- ◆**藩史研究会**：12月12日(金)池田敏之さんにより藩史に準じた形で、関東郡代伊奈氏の歴史について詳細な研究発表があった。参加者24名。1月9日(金)内田勝元さんにより武蔵国岩槻藩の歴史について、謎の岩槻築城から岩槻城の歴史、豊臣秀吉や徳川家康との関係、歴代の藩主とその各家の歴史、時の鐘や岩槻の人形にいたるまで、実地調査を含めた膨大な資料を駆使して興味深い研究発表があった。参加者は23名。
- ◆**古文書で『八丈実記』を読む会**：12月11日(木)、1月23日(金)に例会を開催。参加者は各11、7名。
- ◆**江戸御府内八十八カ所をめぐる会**：第19回として12月18日(木)と12月21日(日)に「第37番瑠璃光山萬徳院」(江東区永代)など4カ所をめぐる。参加者は各24名、13名。また、第20回として1月25日(日)と

1月29日(木)に「第87番神輪山護国寺」(文京区大塚)と第19番瑠璃光山青蓮寺(板橋区成増)の2カ所をめぐる。参加者は各12名、26名。



▲第19番瑠璃光山青蓮寺での一行

- ◆**各サークルとも引き続きメンバーを募集**しています。奮ってご参加ください。参加ご希望の方は、はがきに①サークル名、②会員番号、③氏名をご記入の上、友の会事務局へお申込みください。また**新しいサークルの立ち上げ**希望の方は友の会事務局へお問い合わせください。
- 申込・問合せ先 〒130-0015 東京都墨田区横網1-4-1  
江戸東京博物館友の会事務局 Tel.03-3626-9910

## ◆役員会

12月10日(水)17時開催。オリジナルファイルが出来上がり、発送業務の完了と1人につき636円かかったことが報告された。友の会事務局が12月下旬に移転することになり会長の案内で下見をした。出席者9名。

1月14日(水)17時開催。会長より今まで使っていたコピー機は使えなくなるかもしれないのでリースを考えているとの話があった。レーザーポインターの購入希望があった。出席者11名。

## ◆事業部会

12月4日(木)17時開催。11月の事業報告と今後の事業の担当者を決めた。会員からの意見・要望にあった会員による発表会はルールを検討することになった。出席者18名。

1月8日(木)17時開催。12月の事

## 会議・会合日誌

2008 / 12 ~ 2009 / 1

業報告と今後の事業の担当者を決めた。来年度の事業計画立案のための資料が配布され、次回以降検討していくこととした。出席者17名。

## ◆広報部会

12月19日(金)14時開催。『えど友』校正用のメーリングリストが12月から有料化されたため対応を決めた。新宿日本語学校学園長より『えど友』の一面を縮小転載したいとの許可願が館長宛にあったことが報告された。『えど友』48号の担当者を決めた。出席者9名。

1月23日(金)14時開催。『えど友』48号の担当者、進行状況を確認した。

執筆担当者の職務放棄があり非常に困った事例が報告された。出席者8名。

## ◆総務部会

12月26日(金)12時開催。藤井氏よりオリジナルファイルについての報告があった。『えど友』47号等を発送したほか、特別観覧会等の受付担当者を決めた。出席者16名。

1月28日(水)12時開催。来年度総会に向けての日程、準備について話合った。出席者12名。

## ◆役員等候補推薦委員会

1月13日(火)17時開催。次期役員等の推薦について話合った。出席者10名。

## ◆文政町方書上翻刻プロジェクト

1月15日(木)、27日(火)Bグループ例会開催。出席者各9名。

1月22日(木)、29日(木)Aグループ例会開催。出席者各8名。

## 京成白髭線が 延伸されていたら

寺島 玄

京成<sup>しらかげ</sup>白髭線は昭和3年(1928)に開通した。曳舟と八広の中間にあった向島を起点とし、玉の井を経て隅田川東岸の白髭までの1.4kmを結んだ。

当時京成電鉄は押上止まりだったため、都心、特に浅草延伸を画策していた。押上から浅草の間は1.5kmに過ぎなかったが、その最短ルートはすでに東武に先取りされていた。やむを得ず、京成は千葉方面に逆行し、迂回して北側から千束を経て浅草に乗り入れることにした。その一部が白髭線だった。

昭和7年(1932)ライバルの総武線が御茶ノ水まで電化延伸を果たすと、京成にとって浅草への早期乗入れが死活問題となった。追い詰められた京成は、免許申請の件で疑獄事件を起こし、延伸計画は頓挫した。

白髭線は盲腸線となったのである。途中駅の「玉の井」は銘酒街として賑わっていたが、不便な白髭線を利用する物好きは少なく、昭和13年(1938)に、乗客減を理由に廃線となった。今日現地へ行っても白髭線をしのぶことは難しく、土地の人々の記憶からも「京成白髭線」は消えようとしている。

仮に白髭線が伸びていたらどうだろう。

隅田川を越えればすぐ三ノ輪だ。ここで王子電軌(王電・都電荒川線)と接続する。同時期、東上線や西武線は、浅草方面への便をはかり、起点を王電の大塚・早稲田に置こうとしていたようだ。昭和2年版『西武電車沿線案内』には高田馬場から早稲田まで、計画線が記されている。西武の、王電と接続

しようという意図がうかがえる。もし各社の思惑がまとまったなら、荒川線を核とした城東・城北を結ぶ一大交通網ができただろう。

かつてこの地域には、豊島氏・葛西氏が割拠した。千葉氏ともども桓武平氏の流れをくむ仲だ。そんな地霊も手つだって川で隔てられた町と町が固く結ばれる。従来の下町とは違う独特な文化圏が「川の手」にできる。

乗り入れ運転は、原則として京成高砂と西武石神井間で行う。急行も運転する。停車駅は青砥・向島・三ノ輪・王子・西巣鴨・大塚・早稲田・高田馬場。業平の東下り伝説のルートが白髭線に沿っているから、愛称は「業平号」がいい。

帝釈天の庚申の日には柴又まで、潮干狩りの季節には谷津遊園まで、西武から臨時の直行列車が走る。谷津海岸は海水浴でも人が出るが、そのシーズンに直行便はない。石神井公園プールの客が減る、と西武が渋い顔をするからだ。

(参考文献)

『京成電鉄 85 年の歩み』 平成 8 年  
京成電鉄株式会社総務部  
東京朝日新聞 昭和 3 年 8 月 17 日  
東京朝日新聞

昭和 3 年 8 月 18 日夕刊

『溼東綺譚』 永井荷風

## 「百人一首和歌始衣抄」

佐藤幸彦

友の会の皆様なら落語の「ちはやぶる」をご承知であろう。この唄の出典が、山東京伝の「百人一首和歌始衣抄<sup>しやう</sup>」である。この洒落本<sup>しやれほん</sup>には小倉百人一首から 17 首を選んで、珍解釈を発表している。中から面白そうなのを選んで二、三ご紹介しよう。江戸文学なので差別語や差別的表現がまじってしまいが、ご勘弁を。歌は濁点を打つていないものもあるが、適宜補って解釈していただきたい。

つくはねのみねよりおつるみなの川  
こひそつもりてふちとなりぬる

武蔵の国、葛西に孫右衛門という水呑み百姓がいて、それに二人の娘がいた。頃は正月この姉妹もちよつとお洒落して、羽子つきなんぞしている。この姉妹、姉をみね、妹をおつると言った。みねよりおつるの方が可愛い。葛西は平べったい土地で野原と川ばかり。つまり皆野川だ。当然みねがついた羽子は川へ落ち、おつるのは野原に落ちる。みねははしたないよ。尻っ端折りで拾いに行く。おつるは「まあ」と言ったきり、拾えずにいる。色っぽ<sup>いね</sup>いねー。これを見ていたのが地頭某殿だ。おつるの気性をめで給い、妾に抱え賜うことになった。おかげで孫右衛門はお屋敷の鯉を自由にとることを許可され、彼はその鯉を葛西じゅうに売りさばいて大金持ちになり、おつるはお世継ぎを宿し、そのお祝儀に孫右衛門は 50 人扶持を頂くことになった由。つまり鯉ぞつもりて扶持となりぬる、だ。

瀬をはやみ岩にせかるる滝川の  
われても末にあはむとぞ思ふ

この歌は大変判りやすい。大磯の廊、荻屋の滝川という遊女の話である。瀬尾<sup>おはやみ</sup>隼見という若侍が滝川のなじみだった。そこへ通称「岩さん」という客がいて、隼見との仲をせいて滝川を呼ばせなかった。滝川は岩にせかれたり遣り手婆にせかれても、隼見が忘れられず、たとえ尻が割れても仲の町の末の裏茶屋でなりと会おうという深き心を歌に託したのである。

今こむといひしはかりになかつきの  
ありあけのつきをまちいてつるかな

これは素性法師が初午の日に王子稲荷へ詣でた時の歌である。今コンと言ったのは狐じゃないか、と芝刈りの男と菜っ葉を担いだ男が瀬見合わせているうちに、真っ昼間から一寸先も見

えぬ暗闇になった。夜通しついている  
行灯を「有明行灯」というのはご承知  
のとおりだが、彼方にその有明行灯が  
ついていたので、それを目指して歩い  
たら明るい街へ出たことであつたよ。  
さては狐に化かされたかと、眉に唾を  
つけたがもう遅かつたというお話であ  
る。

やへむぐらしける宿のさひしきに  
人こそみえねあきは来にけり

下野の国真間の継橋のほとりに住  
む、鳥山検校という盲目ながら最高位  
の人、財産はたんまり有って、松賀屋  
三代目の瀬山を身請けしてひっそり住  
んでいた。これは実話で当時の江戸で  
は瓦版にもなつたらしい。

利根川の兩岸は俗にいうむぐらもち  
というものが沢山いて、庭の土を八  
重十文字に持ち上げる。「八重むぐら」  
とは真間ののどかな景色を歌つたもの  
だ。鳥山は瀬山と毎日しげつてばかり  
居た。「しげる」とは男女が相睦み戯  
れることである。瀬山は女郎の時から  
茶事などを好み、寂びた気質で、住ま  
いの趣向もすべて瀬山の好みで作つた  
ので、棲み家は自然もの寂びた気配が  
あつた。つまりしげれる宿には寂びし  
気があつたのだ。しかし、それだけ瀬  
山が数奇をこらしても肝心の人が目  
が見えないのは残念なことである。いつ  
しか瀬山も飽きが来て、ある夜ひそか  
に家出をしてしまった。

風をいたみ若うつ波のおのれのみ  
くだけでものをおもう(ふ)ころかな

いつれの御時にかありける、みかど  
高浜の民にみことのりして一つの岩を  
硯に彫らせしことを詠める、という荘  
重な書き出しである。さて高浜で名人  
の間こえ高き硯師、風邪気味にて節々  
が痛み、いてて、いてて、と唸ってい  
た。綸言をきいて汗も引いたので、仲  
間を大勢雇つて岩を波打ち際まで引き  
寄せた。仲間達は自分の鑿で他人のこ  
とはお構いなしに石を砕いた。しかし  
それでも岩は大きくて重い。けっきよ  
くコロを使って引き上げた。

最後の一首は山東京伝の作ではない  
ようだが、名歌ゆえ紹介する。

淡路島かよふ千鳥のなく声に  
いくよねざめぬ須磨のせきもり

淡路島という相撲取りがいた。有名  
ではないが十両かそこらではあつた  
らう。その淡路島が通いつめた芸者を  
千鳥と言つた。この千鳥さん、淡路島  
の来る日はつい大きな声が出てしま  
うのである。襖一つ向こうに寝ている妹  
芸者の幾代さんはたまらない。「いい  
加減にしてよっ」というわけだ。そこ  
で淡路島は身をすくめて「すまん」と  
謝まるのである。「すまんと関取」と  
いうべきところを「須磨の関守」と  
いつた作者の感性は素晴らしいではな  
いか。

## 中山道ウォーキング ～蕨宿から巢鴨まで～

中里弘子

健康維持のために夫婦で始めた  
ウォーキング。しかし、ただ歩くだけ  
では楽しくない。古地図を片手に江戸  
の面影を訪ねて歩くようになったら、  
その面白さにすっかりハマってしまった。  
そのきっかけとなつた中山道散策  
について書いてみようと思う。

中山道は、江戸時代の五街道の一つ  
で、江戸の日本橋から出発し、草津宿  
で東海道に合流し、京都の三条大橋に  
至る。東海道に次ぐ主要街道である。  
記念すべき(?)中山道ウォーキング  
第1回目は、我が家からすぐ近く  
にある蕨宿を出発し、板橋宿を経由して  
巢鴨を目指してみることにした。

蕨宿は日本橋から数えて2番目の宿  
場である。今もなお旧家や蔵が街道沿  
いに並び、当時の面影を残し、とても  
いい雰囲気。中山道は、將軍家に嫁ぐ  
姫君たちの通行に使われたため、別名  
「姫街道」とも呼ばれる。ここ蕨宿で  
は「蕨本陣跡」として、加兵衛家の本  
陣の敷地の一部が公開されているが、  
十四代將軍・徳川家茂に嫁いだ和宮も  
輿入れの際には中山道を通り、この本  
陣で休泊したそうだ。

さて、ここ蕨宿でもお隣の浦和宿同  
様、うなぎが名物だつたらしい。街道  
沿いに江戸元禄時代創業の「うなぎの

## 友の会事務室は地下1階へ



前号でもご案内しましたように友の  
会事務室が本館地下1階へ移転し、今  
までの部屋より若干広くなりました。  
「守衛室」とある入口から入り、エレ  
ベーターで地下1階に下り、「案内表  
示」にしたがって進むと友の会の部屋  
に着きます。写真は事務室の内部です。  
なお、従来ここにあつた映像ホールは  
7階に移りました。

## 原稿を募集します

会員の投稿欄「えど友プラザ」  
への原稿を募集しています。戦前  
戦後の思い出、名所めぐりの感想、  
趣味や所属サークルのできごと、  
あるいは東京や江戸に関するこ  
などを1000字程度にまとめて事  
務局宛お送りください。採用分  
については記念品を差し上げます。  
なお、原稿はお返ししません。

今井」といううなぎ屋さんがあるのを見つけた。こぢんまりとしたお店だが、<sup>のれん</sup>暖簾と店構えに歴史を感じる。うなぎ屋めぐりを趣味とする我々にとって、これをはずすわけには…と一気に気分が盛り上がったものの、残念、定休日だった。また改めて行くことを心に誓い、蕨宿を出発。

「戸田の渡し」があった戸田橋から荒川を渡り、まずは板橋宿を目指す。板橋宿まではもっぱら国道17号に沿って歩いていくが、車の交通量も多く、残念ながら当時の雰囲気を感じることはほとんどできなかった。

蕨宿から板橋宿までは2里10町(約9km)。板橋宿には「板橋」の地名の由来となった橋が今も石神井川にかかっている。

その板橋宿を過ぎると巣鴨はすぐである。巣鴨は「おばあちゃん原宿」として有名だが、通っていた学校がすぐ近くにあり、個人的にもとても懐かしくて馴染み深い町。とげぬき地蔵のある「地藏通り商店街」は相変わらず賑わっており、活気があって歩くだけでも楽しい。我慢できず、いの一番に学生時代によく食べた巣鴨名物の福々まんじゅうと塩大福を買って食べた。懐かしさを割り引いても、やはりおいしい。(ここまでのウォーキングで消費したカロリーは一気に逆戻りしてしまったが…)

蕨宿から巣鴨まで、およそ3里、約13kmのウォーキングだった。江戸時代の旅人は1日に40km程度歩いたと聞く。それには遠く及ばないが、少しはその気分が味わえた気がする。これからも古地図を片手に江戸ウォーキングを楽しみたい。

## 高尾山を歩く

福島信一

サラリーマン生活をそろそろ終わろうという10数年前に、山が好きな友人に誘われました。「これからはもう年

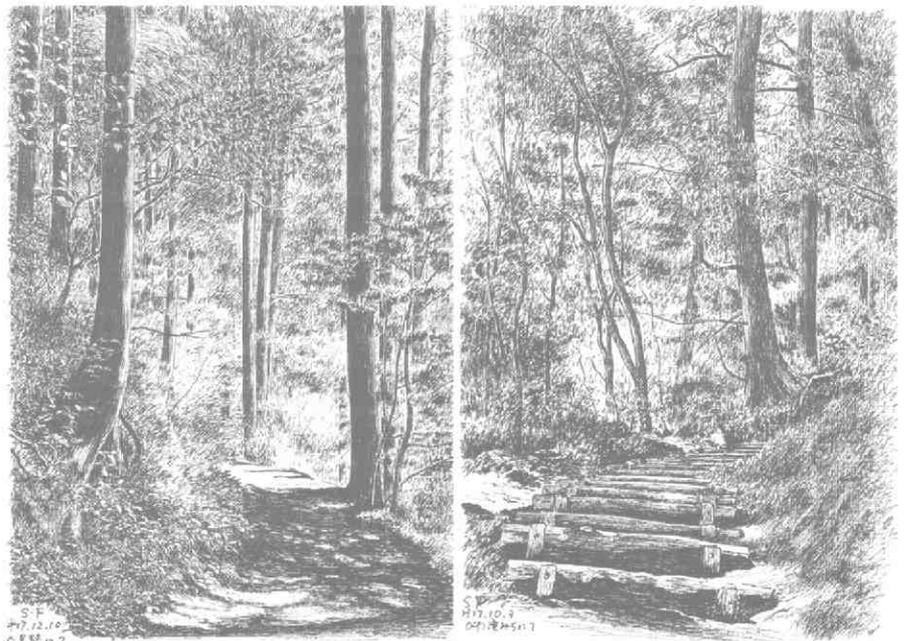
齡的に体力を付けるということはない、せめて現在の体力を維持する、ということに努めるしかない、それには登山が一番!」というわけでその友人たちと東京から近い山、そして高くない山、いわゆる“低山行”を約1年にわたって行いました。川乗山、陣馬・<sup>かげのふ</sup>景信山、金時山、明神ヶ岳、筑波山、大山、丸山、日和田山、高水三山、高尾山…などに登り、その結果、高尾山が私の山になりました。思えば、ミシュランが三ツ星を付けるより10年以上も前になります。

高尾山に決めた理由は、都心から近いのかくも自然に満ちあふれていること、他のどの山よりも交通アクセスがよいことでした。京王線の高尾山口駅を出ると、すぐ登れる(登る時間は稲荷山コースでも6号路でも1時間少し)、降りてくるとすぐ電車に乗れる、その便利さでした。こうしてなんだか行っているうちに、年間20回登る目標を立て、冬の足場が凍結する時期は別にして、四季折々、天気の良い日を選んで出掛けるようになりました。春先の一斉の新芽や、美しい新緑や小鳥のさえずり、夏の日木漏れ日とにぎやかな蝉の声、そして初秋から初冬にかけ紅葉していく山々、踏みしめる枯

葉の音、そしてときどきその姿を見せる富士山。同じところに何度も行ってそんなに面白い? と聞かれることがありますが、私の答えは、季節が違いますがひとつ、あとは行くたびに太陽の方位も高さも違うので、同じ風景でも光や陰のせいで、そのときしか見られない発見がある、それにいつ行っても沢山汗をかいた後のさわやかさ、が得られることでしょうか。

高尾山には有名な<sup>みこいん</sup>薬王院という大きなお寺があり、ここに参詣する人が昔から多いようです。江戸時代には、高尾山は大山不動、成田山、武州御嶽山などととも江戸から行ける参詣対象の寺社、霊山であり、江戸から2泊3日、あるいは3泊4日の行程にありました。その時代のある記録によれば、例えば600名の参詣者があれば、4分の1の150名ほどが江戸から歩いて出掛けた人たちでした。

私の場合、出掛けて新宿で電車を乗り換え、山頂で弁当をとり、降りて帰ってくるまで約7時間です。2泊3日の時代から考えますと随分速く行けるようになりましたので、昨年の12月に通算で、ちょうど200回目の高尾山詣でとなりました。



▲ペン画・高尾山風景 (いずれも筆者描く)

【井戸の茶碗】



今は駐車場となっている清正公様境内

落語のテーマに沿って、江戸風情のなごりを散策しています。

今回は井戸の茶碗。娘とともに西応寺裏長屋に住む千代田卜齋は、以前は由緒ある身ながら今では昼間は近所の子供らに素読を教え、夜になると口過ぎのため街角で売卜をしている貧乏浪人です。彼が住んでるボロ長屋へ通りかかった屑屋の清兵衛さんが、卜齋から無理やり買わされた煤けた仏像を「それではお預かりするということで…」と持ち歩いていると、それが芝白金にある肥後細川屋敷の藩士高木左太夫の目に留まり、引きとられることになりました。さて左太夫が古びた仏像をぬるま湯で洗っていると、台座の底紙が破れて仏像の腹の中から、なんと小判で50両もこぼれ出てきました。そのあとは、侍どうしお定まりの清廉くらべ正直ごっこという展開。やせ我慢と意地の張り合いが爽やかに笑わせませす。間にはさまった清兵衛さんはそれぞれに二人から脅かされて大弱り、卜齋について「昼は瘡毒で夜は梅毒になる」というトンチンカンな説明をしたり、左太夫も年は若い武芸に長じている様子。困り果てた清兵衛さんが大



▲清正公覚林寺

家さんと相談し、ようやく三方分け合いということで話がまとまりました。そこでお礼にということで、卜齋から左太夫へ贈った茶碗が、これまた「井戸の茶碗」と称される天下に二つという珍品名器。細川侯がお買い上げとなり、ますますいいことづくめです。こうしたイキサツがきっかけで、卜齋の娘を左太夫が嫁にもらうことに…噺のオチもおだやかでスッキリしています。

噺の中で「支度金として…」という何気ない言葉で、この貧乏娘が美貌であるとわかります。志ん生も強調していますが、裏長屋なんぞに住む“粗服ながらも美女”って憧れますね。

カネにきれいな江戸っ子？

「貧乏だけどカネにはキレイ」という落語は、清廉好き江戶っ子DNAに共鳴するようです。こうした噺はほかにもいくつかありますが、江戸っらしいカネ離れの良さを誇るのは、専ら町人たちや職人衆であり、サムライが主人公のこの噺はいくらか様子が違います。聞けば「細川の茶碗屋敷」という講談を人情噺に仕立てたものだそうです。仏像のお腹に50両も入っていれば、かなり重たいゴトゴト音がして気づかない訳がないはず、なんてストーリーの設定にはすこし無理があり、まさかという部分もありますが、全体としては明るくて嫌味もなく、あとあじのいい噺だと思われませす。

舞台は港区シリーズ

屑屋清兵衛さんの住まいは麻布谷町、西応寺町は芝二丁目、肥後屋敷は白金高輪、清正公覚林寺は二本榎と今回は港区シリーズです。どの場所にも昔のおもかげはほとんど期待できませんが…。さて覚林寺の掛け茶屋では屑屋仲間の噂話がしきり。細川屋敷脇を通る度に呼び止められて、いちいち人相を改められるけれど、あれは仇討ちの相手を探しているに違いない、というくだりが笑わせませす。覚林寺の前にある「高輪コミュニティぶらざ」横の急階段を上ると、ここが旧細川邸の跡で堂々た

る椎の木がそびえています。都の天然記念物に指定されている大樹で、上部は伐られています。ゴツと瘤だらけ幹の太さは8m以上もあり、力強い雄姿は一見の価値があります。細川屋敷は忠臣蔵でも有名な場所、それというのも赤穂義士のうち内蔵助ら17名がお預けのうえ切腹を遂げたところ。細川家の彼らへの扱いは、上客としてきわめて丁重にもてなし、いざ切腹という段では藩を挙げての対応ということで、介錯人には腕利を17名選んだということです。



▲旧細川邸の巨大シイ

高輪を歩くと

落語「井戸の茶碗」の時代設定は知りませんが、もしかすると高木左太夫も義士切腹の介錯人の一人ではなかったか？ 仏像から茶碗へさらに忠臣蔵へと、「武士の情」に因む虚実ないまぜの連想が浮かんできます。ちなみに泉岳寺へは此処から数分の近さです。



▲プロイセン公使館だった広岳院

細川屋敷から200mほど南に、幕末にプロイセン公使の宿寺となった「広岳院」があります。本堂はその後火事にあわず、当時のまま現存する唯一の建物ということです。さらに500m南には小ぎれいな「食とくらしの小さな博物館」があり、『錦絵に見る江戸の食文化』という興味深い展示をしていました。

【取材】文・写真：広報部会・稲垣武志  
イラスト：同・松原良

# 催事案内

## 古文書講座

### 新年度は5月から開講

古文書講座の新年度第1期は5月から下記日程で開講します。申込の受付は3月末までです。多数のみなさんのご参加をお待ちします。

#### ◆入門編

- 講師：小松賢司さん(学習院大学大学院史学専攻)
- 開催日：5月13日(水)、6月3日(水)、7月1日(水)
- 時間：A講座は10:30～12:30 P講座は14:00～16:00  
(注意) A講座とP講座のどちらを第1希望とするか明記してください。記入のない場合はどちらでも可とみなして調整します。

#### ◆初級編

- 講師：長坂良宏さん(学習院大学大学院史学専攻)
- 開催日：5月20日(水)、6月17日(水)、7月15日(水)
- 時間：14:00～16:00

#### ◆中級編

- 講師：小宮山敏和さん(徳川林政史研究所)
- 開催日：5月16日(土)、6月20日(土)、7月18日(土)
- 時間：14:00～16:00

- 会場：各講座とも江戸博1階会議室または学習室1、2
- 定員：各講座とも80名(会員のみ)
- 参加費：各講座とも全3回1,500円(初回一括払い)
- 申込締切：各講座とも3月31日(火)

【企画担当責任者】上田太一(事業部会)

## 友の会特別観覧会

### 特別展「手塚治虫展」

◆手塚治虫は、日本における「ストーリー漫画」と「アニメーション」のバイオニアとして、昭和の時代に活躍し、現代の文化、芸術、科学にまで影響を与えました。今回の特別展は、直筆の漫画原稿やアニメーション資料、愛用品などを中心に手塚治虫の生涯と作品を検証するとともに、現代に与えた影響を確認するものです。会場では「鉄腕アトム」をはじめ人気キャラクターも展示され、彼の世界観を感じさせる空間演出で大人から子供まで楽しめる特別展です。担当の江里口友子学芸員(展示企画係長)に「見どころ解説」をお願いしてありますので、ご期待ください。

- 開催日：4月21日(火)17:00～19:00
- 申込締切：4月9日(木)必着
- 会場：江戸東京博物館・1階会議室/企画展示室
- 定員：100名 同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者700円(当日払い)

【企画担当責任者】松原良(事業部会)

## 友の会セミナー

### 第79回「江戸っ子とは～都市江戸の成立と発展～」

講師 赤坂治績さん(歌舞伎・江戸文化研究者)

◆江戸は政治をするためにつくられた都市です。大名とその家来・宗教者・職人・商人などさまざまな人たちが集められましたが、武士と男がとくに多かったのが江戸の特徴で、そのため荒々しい気風が醸成されました。江戸っ子という意識が生まれたのは享保期(18世紀前半)以降とされますが、江戸っ子の代表・助六を例に、江戸っ子とは何かを探るお話をさせていただきます。

○講師略歴：あかさか・ちせき

昭和19年(1944)山梨県生まれ。劇団前進座・演劇出版社勤務を経て、フリーの歌舞伎・江戸文化研究者。執筆や各種文化講座での講演、テレビ・ラジオへの出演を通して、歌舞伎・江戸文化の啓蒙に努める。『江戸っ子と助六』(新潮新書)『知らざあ言って聞かせやしょう』(同)『歌舞伎ことばの辞典』『ことばの花道』など著書多数。

- 開催日：3月28日(土)14:00～15:30
- 申込締切：3月17日(火)必着
- 会場：江戸東京博物館・1階会議室
- 定員：100名 同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】末永俊幸(事業部会)

### 第80回「千社札にみる江戸の社会」

講師 滝口正哉さん(千代田区立四番町歴史民俗資料館 文化財調査指導員)

◆千社札といえば、独特の書体で名前や住所などを書いた紙製の札で、全国各地の神社仏閣に貼られているものです。現在ではそのデザイン性などが江戸文化を伝えるものとして知られていますが、千社札がいかなる経過をたどって巨大都市江戸のなかに固有な世界を作り上げていったのかということは、あまり知られていません。そこで今回は江戸後期の寺社参詣や出版文化をもとに、千社札の成立と展開を解き明かさせていただきます。

○講師略歴：たきぐち・まさや

早稲田大学教育学部卒業。立正大学大学院文学研究科博士課程満期退学。文学博士。千代田区立四番町歴史民俗資料館文化財調査指導員。専門は近世都市史・文化史。かつて江戸博で竹内誠館長の講座を受け、江戸に目覚める。主に江戸庶民と寺社との関わりを中心に研究している。

- 開催日：4月21日(火)14:00～15:30
- 申込締切：4月9日(木)必着
- 会場：江戸東京博物館・1階会議室
- 定員：100名 同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】松原良(事業部会)

## 見学会

### 「江戸城周辺の探訪—その5(外濠)」

◆このシリーズの最終回です。江戸城外濠は、江戸城外郭を東西約5.5km、南北約3.5kmの楕円形で囲み、いかなる敵をも寄せ付けない巨大な要塞です。この外濠は絶大な権力をもつ江戸幕府の天下普請により、江戸城総構え工事として完成させました。今回はその外濠跡に沿って、溜池～数寄屋橋門～常盤門までを散策し、現在はほとんど埋め立てられてしまいましたが、その周辺に残る遺跡、遺構を探訪し、江戸城外濠の壮大さと歴史をしのびます。

所要時間は約3時間、大手町呉服橋で解散となります。

- 開催日：3月29日(日)12時45分集合。
- 集合場所：東京メトロ「溜池山王」駅7番出口(地上)、山王パークタワー前。
- 申込締切：3月17日(火)必着
- 定員：100名 同伴者可(はがきに氏名、住所、電話番号連記)
- 参加費：会員、同伴者とも500円(当日払い)  
【企画担当責任者】山本隆(事業部会)

### お申込方法

お申込方法

◆普通はがきに、①催事名・開催日、②会員番号、③氏名(同伴者連記)を明記して下記の「友の会事務局」へ。

「往復はがき」の必要はありません。

なお、見学会に限り傷害保険の関係で同伴者の氏名、住所、電話番号も書いてください。

- ◆締切：各催事の案内をご覧ください。
- ◆申込は、各催事ごとに会員1人1通。
- ◆友の会へのご意見・ご要望もご記入ください。
- ◆申込先：〒130-0015 東京都墨田区横網1-4-1  
江戸東京博物館友の会事務局

\*「えどはくカルチャー」など江戸博への申込と違い、普通はがきで宛先も「友の会事務局」と明記ください。お間違いない！

\*お申込いただきますと、「受講票」をお送りします。当日ご持参のうえ、受付でご登録ください。

なお「受講票」は逐次お送りするのではなく、申込締切数日後一斉にお送りしますので、それまでお待ちください。

\*いずれも申込多数の場合は抽選となることがあります。

\*「受講票」未着のお問合せや参加予定変更の連絡などはなるべく事務局員出勤の水曜日か金曜日(10時～12時、13時～17時)にお願いいたします。

\*「受講票」がないと受講できません。必ず事前に申込をしてからご参加ください。

## 会員優待のお知らせ

好評開催中!

### ●日仏交流150周年記念特別展

#### 「薩摩焼 ～パリと篤姫を魅了した伝統の美～」

会期 2009年2月14日(土)～3月22日(日)

休館日：毎週月曜日

会員：一般500円、65歳以上250円、大・専門生400円

同伴者：一般800円、65歳以上400円、大・専門生640円

\*小学生・中学生・高校生は65歳以上と同じ

### 次回予告

### ●生誕80周年記念特別展

#### 「手塚治虫展

#### ～未来へのメッセージ～

会期 2009年4月18日(土)～6月21日(日)

休館日：毎週月曜日、ただし5月4日(月)、11日(月)、

18日(月)は開館、5月7日(木)は休館

会員：一般650円、65歳以上320円、大・専門生520円

同伴者：一般1,040円、65歳以上520円、大・専門生830円

\*小学生・中学生・高校生は65歳以上と同じ

### 企画展のご案内

好評開催中!

### ●企画展

#### 「えどはくでおさらい!江戸時代」

会期 2009年2月24日(火)～3月22日(日)

会場 常設展示室5階 第2企画展示室

### ●次回企画展

#### 「東海道五十三次

#### ～あの浮世絵がやってきた～」

会期 2009年4月1日(水)～5月10日(日)

会場 常設展示室5階 第2企画展示室

### 【訂正】

前号(No.47号)5ページのセミナー記録中、左列下から3～2行目の「…安政の大獄を批判したことから12歳で隠居謹慎…」は年齢に誤りがあり、「…安政の大獄を批判したことから22歳で隠居謹慎…」でしたので、訂正いたします。

### 会報<えど友>第48号

平成21年3月1日発行(奇数月1日発行)

編集・制作：江戸東京博物館友の会広報部会

編集長：松原良 副編集長：菅沼和男 発行人：佐藤幸彦(副会長)  
編集人：岡橋園子、稲垣武志、岡田守弘、岡本静雄、深尾恵美子、  
福島信一、清宮寿朗、小松美幸、松田悠美子、中里弘子  
発行：江戸東京博物館友の会  
〒130-0015 東京都墨田区横網1-4-1 電話 03-3626-9910